

課外活動指導における携帯メールの有用性について

須甲 克也*1

Usefulness of e-mail by mobile phones in supporting extracurricular activities

Katsuya SUKOU

In school education, it is important to teach while watching student's face directly. However, the educational effect is more increasing when combined with indirect teaching using various tools. Indirect teaching method has a variety of means. As the traditional educational materials, it is printed on paper. Recently, also it is using the electronic media. Here, I will focus on e-mail by mobile phones in particular. This paper considers that in the supporting extracurricular activities, e-mail by mobile phones is useful.

KEYWORDS: e-mail by mobile phones, direct teaching, indirect teaching, extracurricular activities

1. はじめに

学校教育の正課科目の指導は、学生と直接対面しながらの授業が中心であるが、間接的な指導、例えば、課題や授業ノートの提出、試験答案の添削等を併用することで更に効果があがる。これと同様に、クラブ活動等の課外活動についても、基本的には直接対面しての指導が重要であるが、正課に比べれば、直接対面時間を十分にとれない場合もあり、さらに間接的な指導に関しても様々な制約から、正課に比べると徹底することは難しい。そこで、本稿では、課外活動において対面しながらの直接指導に併用する形で、携帯メールを指導用ツールとして利用することが有効であることを述べる。正課に対する間接指導や、課外活動に対する対面指導との比較を交え、特に運動部の活動指導に重点を置いた指導事例を紹介する。

2. 対面指導と間接指導

正課においては当然ながら、授業という直接対

面指導を中心に教育を行っているが、有効な間接指導の併用が必要である。ここでいう間接指導とは、様々な情報伝達媒体を介しての指導と考える。

例えば、学生に自学自習させるためには、効果的な課題や宿題を与えて提出させたり、試験等の出題範囲を明確に設定することにより、学生自身の自主的な学習を促すことに繋がる。このように間接指導ならではの効果もある。

直接対面しての具体的な指導は、学習者の反応に臨機応変に対応しながら、内容や提示方法をその場で修正したり、補足したりすることができることに、その有効性がある。しかし、指導時間や、内容量には限界がある。それに対して、指導者側からの上手な働きかけにより、学習者が自発的に自学自習をする場合の内容量には制約が少ない。

従って、直接指導と間接指導の両者をバランス良く組み合わせることが重要である。

正課活動、課外活動、及び対面指導、間接指導を基準に、指導を以下の4つに分類してみる。

- (1) 正課活動に対する対面指導
- (2) 正課活動に対する間接指導

*1 一般科(Department of General Education), E-mail: sukou@oyama-ct.ac.jp

(3) 課外活動に対する対面指導

(4) 課外活動に対する間接指導

(1) の具体的な場面としては、カリキュラムに組まれた正規授業や、放課後等を実施される補習授業、学生の個人的な質問に対する直接的な回答等があげられる。また、(2) の働きかけの結果、学習者が(1) の場面で指導を求めて来る場合もある。(2) (3) (4) の具体的事例については、次項から順に示す。

3. 正課における間接指導

本稿では課外活動における間接指導が主要テーマであるが、比較対象として正課に対する間接指導事例を提示しておく。

3.1 印刷媒体による指導

学習者個々に対する個別指導としては、テスト答案や課題レポートに対する添削指導、授業ノート提出に対する添削指導等があげられる。クラス等、学習者グループ全体に対しする指導としては、教材プリントの配付による指導があげられる。

先にも述べたように、これらの指導に対しては、課題の提出期限に先立って学習者からの直接的な質問があったり、答案返却後の添削に対して学習者から直接的な問い合わせがあったり、また、教材プリントに関する自由な質問をを許可することにより、直接的な対面指導に繋げることができる。

3.2 電子化媒体による指導

CD-ROMやDVD-ROMを用いた教材ディスク配付による指導や、WEB上のシステムやEメールによる指導等があげられる。

基本的な教材内容については印刷媒体による指導と同様であるが、教材の容量面では制約が少ない。印刷媒体に比べて大量の教材内容を提示できる。予め、想定される質問等に対する回答も含めることも容量的には可能である。また、WEB上システムやEメール等における指導においては、学習者との直接的なやり取りを許可すれば、場合によっては、授業の対面指導以上の個別対応が可能である。

一方で、大量な教材コンテンツを事前に作成する手間や労力、WEBやメールで学習者とやり取りする時間的な制約は存在する。

4. 課外活動に対する対面指導

課外活動の場面は様々あるが、ここでは、学級担任として、部活動顧問として、の2つ立場での指導について述べる。

4.1 学級担任としての対面指導

学級担任としての指導においては、正課としてのホームルームすなわち特別活動の時間における対面指導の他に、休み時間や放課後等に、教室内で複数の学生に対する指導や、学生個々を呼び出して行う個人指導がある。

学級担任としては、学生個々の学校生活全般に対して様々な指導が必要である。学級全体に対して一斉に指導する以外に、学生個別に対しての固有の指導をする場面が比較的多い。

その際の問題点は時間的な制約である。学級内の個々の学生をに対して個別に対面指導するためには大変時間がかかる。例えば40人学級の学生個々と個別面談を10分ずつ実施したとしても、7時間近い時間が必要となる。従って個別の対面指導に関しては、学級全員に対して頻繁に行うことはできない。通常は必要に応じて特定の学生を呼び出しての指導を実施することになる。

4.2 部活動顧問としての対面指導

高専の課外の部活動においては、一般的に顧問教員が常に直接指導することは時間的制約から難しく、学生たちの自主的な活動によって成り立っている。一方で、運動部の場合は部員の怪我防止等の安全面の配慮から、顧問教員が帯同しての活動が必要になる場面も多い。

ここでは、筆者が担当している小山高専バスケットボール部を例として紹介する。

普段の練習には10～15名の部員が参加している。活動時間は、授業のある平日は放課後17時～19時の2時間、授業のない日は午前中9時～12時の3時間、週7日間のうち5日間の練習、2日間の休み。長期の活動休止をするのは、年間4回の定期試験前から試験期間中の3週間程、年末年始や学期末等の1～2週間、大きな大会後の1週間程である。以上を考慮すると、年間活動は30週、150日、360時間程度である。また、それに加えて、年間の大会や練習試合等、対外試合の総数は、週末の土曜日、日曜日を中心に年間20日間程、試合数にして40試合程である。

顧問は、これらの時間すべてを直接指導しているわけではないが、可能な限り部員に対して技術指導を中心とした対面指導をしている。個々のプレーに対する現場での指導は、直接対面した指導の中でなければできない最も重要なものである。

また、合同練習直後には必ずミーティングを実施するが、部員全員に対しての総合的な講評を伝えることが中心で、個々の部員に対する個別指導の内容はそれ程多くはない。

5. 課外活動に対する間接指導

5.1 学級担任としての間接指導

5.1.1 印刷媒体による指導

4.1で述べた、カリキュラムに組まれた時間割の中で直接対面しての指導では足りない部分を配布するプリント等の資料で補っている。連絡や注意喚起のためのプリントの他に、個別面談の補助として、アンケート調査を実施することもある。また、週番日誌の学生の書いた内容に対してコメント記入をすることで、学生と指導教員の間で情報交換をすることもある。

5.1.2 電子化媒体(特に携帯メール)による指導

学生の多くは携帯電話端末をもっているの、それに付随して、携帯メール(携帯電話による電子メール)が利用できる。端末の機種にもよるが、ある程度の人数に対する一斉送信が可能なので、印刷媒体で配布するかわりに携帯メールを利用することもある。

例えば、小山高専で筆者が学級担任を担当した例では、40人中38人が携帯端末を持ち、携帯メールを受け取ることができるので、学級内の連絡網として利用している他、学生との個別連絡にも利用した。昨今のインフルエンザ等による学級閉鎖や学校閉鎖に関する連絡等についても、確実に情報を伝えることができた。さらに、校外研修における学生の自由行動中については、携帯メールによる連絡が必要不可欠であると感じている。

ただし、端末の機種にもよるが、同時送信できる数に制限があるので、クラス40人を2つにグループに分けてアドレス登録をした。

5.2 部活動顧問としての間接指導

5.2.1 印刷媒体による指導

年間や月間の練習や試合スケジュールのような長期の予定表や、特定大会の組み合わせ等の詳細な要項は、紙媒体に印刷したものを配布している。

また、部員自身の活動に対する考察や反省、顧問やコーチへの意見等を知るために、個人ごとの部活動ノートを作成して、活動後に提出させていたこともあったが、なかなか徹底することができなかった。原因は色々あるが、例えば、練習や試合の印象が強いその日のうちにノートに書くように指示しても、それを忘れて次の練習の提出直前にいい加減に書く部員がいたり、ノートを家に持ち帰ってその日のうちに反省や課題を書いたとしても、次の練習時にノート持ってくるのを忘れて提出できないこともしばしば起きた。さらに、ノートを練習時に必ず持ってくることを徹底させようとすると、部室に置きっぱなしにして家に持ち帰って書くことをしなくなった。

もちろんこれは指導力不足も原因の一つであるが、次項にあげる携帯メールによる指導が上記の問題点を解決するきっかけとなった。

5.2.2 電子化媒体(特に携帯メール)による指導

携帯電話で利用できるインターネットサイトの中には、学校等のクラブ活動を支援するものもあり、使い方によっては便利なものもあるが、ここでは主に携帯電話による電子メールの基本的な機能だけをういた場合について述べる。理由としては、インターネットサイトは利用者の登録作業やパスワード設定などの事前準備が必要であるのに対して、携帯メールであれば単にアドレスの交換をするだけで容易に利用できるからである。

また、情報交換をする人数が多い場合は、WEB上のサイトの方が便利な場合も考えられるが、部活動の10～15人程度とのやりとりならば、携帯電話の基本的なメール機能で十分である。特に部活動の指導の場合は、ほぼ毎日のように直接対面指導の場面があって、直接的に情報交換をしているので、その補助的な連絡ツールとしては、携帯電話によるメールが手頃である。

携帯メールでの連絡経路としては、顧問、コーチ、部員である学生、部員であった専攻科生や卒業生等のOB、以上4つのグループの相互間の経路があり、それぞれの経路において頻繁に情報交換が行われているが、まずは、顧問と部員との情報交換に関するものを中心的に紹介する。(図1)

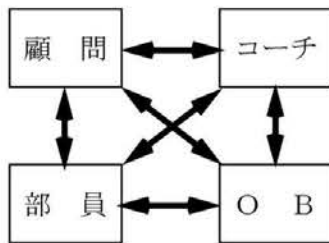


図1:携帯メールでの連絡経路

スケジュール連絡については、基本的には印刷物を配付するが、対外試合などの行事直前のスケジュール確認や変更事項についてはメールで行う。また、大会の組合せ抽選会後に組合せ結果を速報としてメール連絡することで部員のモチベーションをあげる効果がある。さらに、練習休止中の連絡については、印刷物配布では情報伝達が遅れてしまうが、メール連絡は即応性が高い。(図2)

練習再開	高専大会組合せ決定
試験終了の10(木)～練習再開。但し19はバレー部が対外試合で体育館使用のためバスケ部は外部遠征して練習試合を実施	7/10(土)2試合 対 東京高専 対 長岡高専
19(土)会場：城南高 集合時間 8:30 対戦相手 城南高校 上三川高 ⋮	7/11(日)2試合 準決勝・決勝 組合せ 長岡 1 ┌ 東京 2 ┌┐ 小山 3 ┌┐┐ サレ 4 ┌┐┐┐ 長野 5 ┌┐┐┐┐ 茨城 6 ┌┐┐┐┐┐ ⋮

図2:スケジュール等のメール送信例

特定学年の部員や、特定グループにだけ連絡したい時にはメール連絡は有効である。練習休みの期間中で部員と対面する機会が少ないときの連絡に使うことが多く、特に練習再開に先立って事前連絡したいことがある場合に有効である。(図3)

このとき、メールアドレスのグループ分けを学年毎にしておくことで、特定グループへの連絡が容易になる。その他に専攻科生や卒業生、外部コーチとの連絡も携帯メールを利用する。外部コーチの対面指導は毎日あるわけではないので、顧問とのメール連絡が重要な情報交換となっている。

今大会に出場する上級生は君たち2人だけで他は都合で参加できません。

3年以下は試験が終了する明日から練習を再開する予定です

君たちが練習参加する際は事前にコーチに一報を入れて、君たちも練習の指揮に参画して下さい。

⋮

スポーツ救急講習会

既に連絡していたとおり明日講習会です

1年全員と、2年で昨年未受講の者は必ず今回の講習を受講すること。

会場：講義棟1階

講義室

1:30～AED講習会

2:00～テーピング講

⋮

図3:特定グループへのメール送信例

自分自身について
声が出ていた、課題のトラベリングも減ったが、3ptの確率が低い、集中が切れる瞬間がある。

チームについて
全員がコートに立ち全調子が良かったのでチームとしては良い流れだった。わるくなってきたときに上手く立て直せないことがあった。特にスタートメンバーの時に

⋮

自分の良かった事
速攻が出せるように走れた。シュート決定率が高かった。オフフェンスリバウンドがよくとれた。

自分の悪かった事
スクリーンアウトができていない。プレーのつながが遅い。

チームの良かった事
全員のリングへ向かう気持ちが強く、積

⋮

●個人
自分もチームのモチベーションを上げるのに役立った。例えばチームが連続得点しているときに自分も3pを決めるなど。逆に、むやみにひとりで突っ込んだりしてチームの流れを乱してしまった。

●チーム
相手チームより走っている。ディフェン

⋮

チームの良かった所
雰囲気良く、盛り上がっていた。オフフェンス、ディフェンスともにリバウンドがとれていた。特にディフェンスの集中が良かった。

チームの悪かった所
最後のゲームは相手チームのペースに合わせてしまった

⋮

図4:活動に関する感想メール受信例

上記に挙げたのは、顧問やコーチ等の指導者側から部員である学生への一斉連絡の情報伝達例で

ある。それに対して、部員側から指導者側への情報伝達で、指導上最も有用なものは、練習後や試合後の部員個々の意見や反省点である。4. 2にも述べたが、練習後や試合後は必ず対面してのミーティングを行うが、その場で部員個々の意見を全て聞くことはできない。しかし、個々の部員には個別の課題や問題があり、指導する側がその内容を知ることによって指導効果を上げることができる。

具体的には、練習や試合後に、部員個人として、チーム全体としての両方の点について、意見や反省点をメールで顧問とコーチに同時に送信させている。(図4)

以前実施していた個人ノートに書かせて提出させる方法に比べると、その時々々の率直な意見や感想を即座に得られ、また、部員が送信先を顧問とコーチの両者にしておくことで、その情報を顧問とコーチで同時に共有することが可能である。

また、当然のことながら、携帯メールの最も基本的な機能である個人的な情報交換についても、顧問、コーチ、部員、OB相互で行うことができる。具体的な内容としては、活動欠席の連絡、技術的な質問や、それに対するアドバイス、怪我の治療状況の報告等、多岐に渡る。しかも、これらの情報の送信先を複数宛にすることで有効性がある。例えば、活動欠席連絡等は、顧問、コーチ、キャプテンへ同時に送信させている。(図5)

君のディフェンスに関しては精力的な動きで良いと思います特にボールマンに対する継続的プレッシャーと中へのパスに対する引き戻し、シュート直後のボックスアウト移行も素速く問題は有りません

オフェンスに関してはいくつか注文があります。今日の試合中も指示しましたが、カットインの方向がよくありません。ゴールに

昨日の練習後に腰痛がひどくなったので病院へ行ったところ今までの股関節の怪我に加えて、ヘルニアという診断が出ました。

治療に暫く時間がかかり部活ができるようになるまで少し時間がかかりそうです詳しくは次回の練習時に直接話します。従って来週の大会は欠場します。宿泊等のキャンセルをお願いします。

図5: 個人的な連絡メール送受信例

また、コーチからはキャプテンに対して、練習

に先立って練習メニューが送られる。また、部の情報をOBたちに配信することで、大会等に応援に来てくれることもある。

以上に述べてきたように、部活動の関する様々な情報交換を普段から積極的に実施し、継続していることにより、直接部活動と関係ない個人的な情報交換についても活発になっていると思われる。顧問が部員から受け取るメールに限っても、月に50通、年間で600通を超える。

特に、図3で例示した部員からの活動に対する感想や反省メールは、その時々々の個々の指導に役立つばかりでなく。メール全体をまとめることで、活動行事毎の評価や、長期間における部員毎の変化や成長を評価することができる。

現在、対外試合後の反省メールについて、顧問の携帯に送られた部員からのメールを、その都度パソコンに転送し、表としてまとめる試みを始めている。データの全体像としては図6のようなイメージになる。この表を横に見ることで、部員たちの考え方から見た特定の対外試合を評価することができる。また、同じ表を縦に見ていくことで、特定の部員が複数の対外試合を経ていくことでの考え方の変化や成長を見ることができる。

	部員1	部員2	部員3	部員4	部員5
試合1					
試合2					
試合3					
試合4					
試合5					
試合6					

図6: 試合後の反省メールの集積イメージ

実際のところ、表としてまとめなくとも、特定の大会や対外試合の評価はできる。それは、試合直後の比較的短い期間内のほぼ同時期に多くの反省メールが届くので、それらのメールが届く都度に読むことで、表を横に見ることと同等の効果があるからである。ただし、複数の試合の評価を比較するためには表が必要となる。

先の表を横に見ることで部員たちの特定の試合に対する評価や考え方の共通部分が自然と浮かび上がってくる。それを指導者の立場からの評価と重ねることで、その後の活動に対する改善点が見つかる。例えば、指導者として改善したい項目の

中に、部員自身が自覚している弱点であれば、その後の練習にその弱点を補うメニューを加えた際に、部員自身が自覚している故に、その理解や取り組みが深くなる利点がある。

また、部員個人毎の変化や成長を見るためには先程の表は有効である。携帯メールを何回も遡って読んだり、部員毎に受信フォルダーを分けて保存しておけば、特定の部員のメールのみをまとめて見直すことは可能であるが、表としてデータを蓄積した方がはるかに見やすい。携帯メールは逐時性や即応性は高いが、データとしての集積性は必ずしも良くない。図6のイメージであれば、1人に限らず、複数部員の成長の比較も可能となる。

部員個人毎の変化や成長について、特に部員自身が書いた文章から伺える内容を把握しておくことで、その後の練習時に的確なアドバイスをすることが可能になる。

さらに、表としてまとめておくことの最大の利点は、情報全体を見渡せることにある。

例えば、図6のイメージで、部員毎の評価を、部員1、部員2、…と見ていく過程で共通する問題点が存在したり、また、試合毎の評価を、試合1、試合2、…と見ていく過程で共通する問題が存在する場合は、部員個別の問題や、試合別の課題ではなく、部活動そのものの問題点があって、部員が共通に影響を受けていることが分かる。

今後の検討課題として、この表を部員たちに閲覧させることを考えている。同じ試合に対して他の部員がどう考えているかをお互いに知ること、自分自身の評価がさらに深まっていくことが期待される。もちろん部員どうしは、顧問やコーチとの関係以上に普段から頻繁に交流しているので、お互いのメールを読ませなくても、直接色々な話ができるはずである。ところが試合について直接話している内容の中心は、自分の評価というよりは、他者の評価となっている。従って、自己評価や反省については、指導者側が、ある程度強制する必要があるかもしれない。

ただし、現状では、顧問とコーチが読むことを前提に反省メールを書かせているので、もし、他の部員に読ませることを実行する場合、そのことを宣言して後に反省メールを書かせる必要がある。メールの内容に顧問やコーチだけが読み手であった場合との差が出る可能性があるので、現在のところは、実施には慎重で、まだ実行していない。

5.3 運動部指導における実践と理論

運動技術を身につけていく過程で重要なことは、実際に体を動しながら学ぶ実践と、理論的に学ぶ考察である。従って、その両者の要素がバランス良く組み合わせられた指導が理想である。

運動部指導において、前者については技術指導できる顧問やコーチが対応すれば可能である。一方、後者は難しい。部員にその運動について自主的に勉強させることは簡単ではない。

本稿で紹介したように、ある程度の強制をして、練習後、試合後等、部員自らの動きについて自己評価させ、それを文章として書かせることが、理論的な考察に繋がっていくと考えている。

6. まとめ

学校教育においては、正課に対する指導、課外活動に対する指導に関わらず、直接、学生と対面しながら行う指導が最も効果的で重要であることには異論がない。ただし、それに併用して効率の良い間接的な指導を行うことにより指導効果がある。間接指導の媒体としては様々なものがあるが、その中でも携帯メールは大変使い勝手が良い。

情報伝達のタイミングについては、個別、一斉に関わらず、逐時に、即応的に行うことができる。また、その情報の共有性、保存性が高い。問題点となるのは情報の集積性であるが、この点についてはパソコンへ転送して集積し、分析することで対応を検討中である。

学校における平均的部員数の運動部において、携帯メールの情報交換ツールとしての有用性が高い。対面して行う技術指導に対する選手の感じ方やそれに対するアドバイスをすることができたり、対外試合に対する選手個々の考え方の収集や分析が可能である。

今後もこの指導法を継続し、データや情報の収集や分析をしていく予定である。

参考文献

- 1) 須甲克也：課外活動指導における携帯メールの利用，高等専門学校情報処理教育研究発表会論文集，第30号，pp186-189（2010）

[受理年月日 2010年 9月30日]